

箱根駅伝 中大19位



1区で
中大初の
町澤選手



前回比
23秒縮めた
永井主将

東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)は1月2~3日に行われ、昨秋の予選会を7位で通過した中央大学は総合19位に終わった。総合優勝は青山学院大学だった。中大は10位までのシード権は逃したものの、1区の町澤大雅(法2、市立柏高=千葉)、8区の永井秀篤(文4、高岡向陵=富山)両選手が快走を見せた。

町澤選手の1区タイムは1時間2分41秒、全体の区間10位ながら中大新記録をマークした。従来記録は1993年の前田了二選手(1年)の1時間2分54秒。ちなみに中大が初出場した1921(大正10)年の記録は1時間41分6秒だった。

2年ぶり8区を走った永井選手は、同じ8区で初出場した前々回を23秒上回る1時間5分47秒で青学大、駒大に続く区間3位。総合8位を走っていたチームを目標の6位に56秒差まで近づけた。

沿道には2日間で121万人の観客が詰めかけた。出場校減により前回比5万人の減少(大会主催者発表)。中継したテレビ視聴率は往路・復路の平均で28.3%。歴代4位の高視聴率だった。前回比では往・復1.4ポイント上昇となった(関東地区、ビデオリサーチ調べ)。



スタート直後の町澤選手=写真提供・中大スポーツ新聞部

箱根駅伝 中大19位

全国に知られた鉢巻き

力走120点 町澤大雅選手



学生記者 高瀬杏菜(法学部2年)

たすきを付けた精鋭たちが21人並んでいる。1月2日朝。往路スタート地点の東京・大手町。1区はエースやエース級が走って、チームにいい流れをつくりたい。ここでつまずくと後々まで響く。中大で選ばれたのは2年生の町澤選手だ。

「僕のタイム、このなかで下の方なんですよね」「緊張しすぎて縮こまらないようにしたい」「去年のほうが硬くなっていたかな」。前年3区を走った経験がある。負けん気がある。決戦で優劣を分けるのは持ちタイムより精神力だ。

元日は中大多摩キャンパス陸上競技場で1000mを走り、「1本、自分に刺激を入れました」。その後、大手町付近のホテルに入り、当日は朝5時に腹ごしらえ。コンビニのおにぎり2つとカップ味噌汁。補助に箱入りのバランス栄養食を用意した。定番のメニュー、「願掛け」でもあるという。

硬い表情が多いレース直前。町澤選手は先輩とお笑い芸人の話題でおしゃべりしたり、後輩に手や足でちょっかいを出したり、「自分なりにマイペースをつくりました」

こうして号砲前の長い時間を過ごした。することは、すべてこなした。

スタートして間もなく、テレビカメラが町澤選手をとらえた。鉢巻きがクローズアップされた。1区でただ一人の鉢

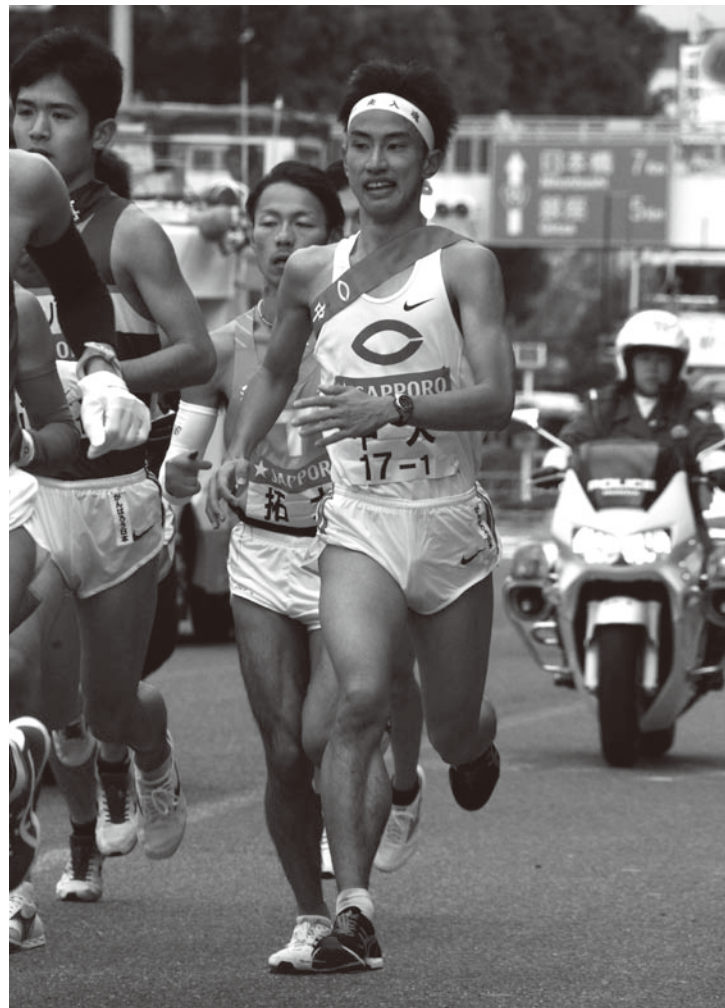
巻きだ。大学選手には珍しい。白字に赤で『一走入魂』と刻まれている。白と赤の中大カラーだ。

「実は偶然なんです」。中学時代、学校が作った公式戦用ユニホームとセットの品だったが、ここぞというレースで額に締めると好結果が出た。中3で出場した全国都道府県対抗男子駅伝(広島)では区間賞を獲得した。

鉢巻きランナーが頑張る。食らいついていく。「15kmまで先頭集団についていければシード圏内に入れる」。その15km付近の京急蒲田駅近くには両親が

待っていてくれる。親の顔を見ればもっと頑張れる、親に自らの成長を見てもらいたい。前夜までに両親と決めた“作戦”だった。

1人脱落、2人と下がり、「13人、残っていました」。15km過ぎ、先頭集団から青学大選手がスパートした。東洋大、明大、駒大が追いかけた。町澤選手は後退してしまったが、1区



力走する町澤選手=写真提供・中大スポーツ新聞部

トップの駒大との差は41秒。「1分離されたらいけない」。そう思っていた町澤選手はホッと胸をなでおろした。

責任を果たした区間10位。シード圏確保の目標を現実視できそうだ。永井主将が「120点の走りです」と称えた。1時間2分41秒は先輩たちをごぼう抜きにする中大の1区新記録だった。

謙虚に

陸上競技を始めたのは千葉・流山の中学からだ。先生から厳しい指導を受けてきた。「勝ったといえども、まだまだ足りない」「謙虚にきなさい」。力走しても、快走しても合格点のゴールはなかったという。謙虚さはいまでも変わらない。インタビュー中も「僕なんか」との言葉がたびたび口をついた。

鉢巻きはテレビを通して全国に知れ渡った。関心は一気に高まり、レース後、ツイッターで「俺も持っているぞ」という言い回しで、久しく会っていない中学の先輩から激励された。「去年も締めていましたけれど、テレビに全然映らなかったから」。こんなところにも快走の喜びを知る。

箱根駅伝の往路を2年連続で走

り、ビッグイベントを肌で感じた。チームとともに悲しみも喜びも知った。4月からは3年生だ。

「勝つことを意識します」「勝ちにこだわりたい」「春のトラックシーズンで(いい)タイムを出して、チームと自分を勢いづけたい」

中大駅伝チームは選手の自主性を重んじ、練習メニューに自分なりの工夫を入れることを許される。ほかの大学では見られないという。厳しくしつけられた中学・高校の経験から、いま手にする自主性は意味をはき違えると大変なことになると知っている。生活面から自らを律することが、レースにつながる。

秋の予選会を勝ちあがり、箱根駅伝でシード権をつかみ、次は優勝へ



復路終了後、常盤橋公園にて応援団からのエールを受ける選手たち

というところまで思い浮かべる。

「名前が大雅でタイガーとも読めませう。虎のように走りますか」

物腰は柔らかいが、その目は笑っていない。

■最近5年間の箱根駅伝1区 中大選手記録

年	選手名	学年	時間・分・秒	区間順位
2015	町澤 大雅	2	1・02・41	10
2014	新庄 翔太	3	1・03・36	14
2013	大須田優二	4	1・04・15	9
2012	西嶋 悠	2	1・02・57	8
2011	西嶋 悠	1	1・04・28	10

永井主将 笑顔快走 区間3位

学生記者 野村睦(法学部2年)



軽快な走りの永井主将

中大選手のなかで、笑顔がひと際印象的だったランナーがいた。主将・4年生の永井選手である。8区で伝統の赤字に「中央大学」と白抜きのたすきを付けるとすぐに笑顔になった。サングラスをしていますが、はっきりと分かる笑顔だ。

後方に雪景色の富士山、その前には浦田春生監督が乗車する運営管理車。そして永井選手。3つのコン

トラストが素晴らしい。これこそ箱根駅伝のイメージだ。

「うれしくて、うれしくて。チャンスをもたらったからには区間賞を取りに行きます」

これまで今シーズンの公式戦出場はわずかに3度。負傷続きだった。昨年10月の予選会出場を断念して、11月の上尾シティハーフマラソンにようやく間にあった。1時間3分台を出

箱根駅伝 中大19位

してレース勘を取り戻した。中学で陸上競技を始めてからシーズン最少出場の不安を消し、晴れの舞台で走れることに大きな喜びを感じていた。

2年前、チームは往路5区で棄権した。復路は記録なしの扱いでも走った。意地をみせた8区のタイムが公式区間賞を上回る“幻の区間賞”と話題になった。

その後、度重なるけがに悩まされた。治ったと思ったら別の部位を負傷する。選手として走れないもどかしさを抱えながら、主将としてはチームの士気を高めたいという、二つの気持ちが交錯した。周囲によると責任感は一層強い。ときに「つらいな」との独り言も。

「新庄や多田をはじめ、同学年みんなのおかげでチームがまとまりました」

競技面でチームを牽引できなければ、生活面で示すこともできる。手洗い、うがいを励行して風邪をひかないように心掛けた。夜は10時に寝て、朝は5時起床。6時開始の“朝練”へ万端の準備を繰り返した。毎朝、部員の表情を見て体調を推し量った。

レース前には 団子とカステラ

8区を走る。レース前の食事はみたらし団子に幅7cmほどのカステラ、バナナゼリー、ハーブティー。中学のころ、母が用意してくれて以来、レース前食事の定番となった。レース4時間前にたいらげて、走る感触を得た。

「いけそうだ」

走り始めて12kmを過ぎたあたりか



快走する永井主将＝写真提供・中大スポーツ新聞部

ら徐々に上り坂になった。16km付近、残り5kmで待ちうけるのが「遊行寺の坂」である。浮沈にかかわるポイント。『不撓不屈』と大書したのぼりが視界に入った。中学までを過ごした故郷、富山県南砺(なんと)市からやってきた大勢の仲間や知人が用意してくれた。不撓不屈(困難にくじけず最後までやり通す)は中学校の校訓。「永井 がんばれ」という横断幕もあり、またまたうれしくなった。「かなり力が入りましたね」

しかし、気負って飛び出すのではなく、ペースをしっかり刻んだ。つらいときには「いける、いける」と沿道ファンには聞こえない程度で自分を励ました。冷静で粘り強く走った。「強くなった自分を確認できました。いままでのモヤモヤを払しょくできました」。区間タイムは2年前を23秒上回った。精神的にも肉体的にも成長した証の23秒更新といえるだろう。

自らが苦しんだから、人の苦しみが分かる。最終10区でアクシデントに見

舞われ、順位を大きく下げた多田要選手(経4、倉敷＝岡山)にかけた言葉は「けが、大丈夫か」だった。「選手は苦しみを自分で乗り越えなきゃいけません。あのとき心配なのは体でした」。窮地の競技者にはありきたりな慰めの言葉はいらない、と言う。「箱根駅伝は一つの大会です。そこからに成長できるか。いいきっかけを与えてくれます」。選手万人に使える言葉だとも言った。

今春から実業団チームのDeNAランニングクラブ入りする。率いるのはテレビ解説でおなじみの瀬古利彦総監督だ。箱根駅伝で育ち、マラソンで名声をはせた大先輩。

永井選手は2020年東京五輪がインタビューで話題になったとき、すぐに言った。「僕、27歳です」。自国で開催する5年後の五輪マラソン出場へ、既にシナリオができていようだ。

中大発箱根経由で、永井選手が世界へ羽ばたいていく。